

編集後記

昼の時間が極端に短くなって厳冬の季節が訪れると、大学院生にとっては論文審査という最大の関門が訪れます。彼らが気力を振り絞って奮闘しているこの時期は私にとって、果たして「自分の頭できちんと考える力を養う（五神次期総長の記者会見より）」よう研究指導ができたかを自問すると同時に、その難しさに圧倒される季節が訪れます。

さて、若手の育成と優遇の大切さに関する議論を学内外でもよく目にする昨今ですが、今月の「物性研だより」の解説記事やインタビュー記事にもそれに関するくだりが何度か現れます。そこからは、新たな研究プロジェクトを成功させるにも、これからの物性研を支えるような研究を行うにも、若者が引きつけられて集まり、興奮と感動に満ちた研究活動を行うことの大切さ、そこからしか生まれないような飛躍的な発展の重要さといったものがビンビン伝わってきます。インタビュー記事での京都大学の有賀教授のお言葉にもあるように、ガリウムナイトライドを捨て去らなかった多様性が基礎研究にとって非常に大事なことであり、がむしゃらに、しかもこつこつとあきらめずに自分の信念に基づいて研究を行えるような若者がどれだけ育ったかが一番のキーだということを教え諭された気になりました。皆さんはどのような感想を抱かれましたでしょうか。

杉野 修